

第二言語としての日本語の擬音語・擬態語の習得
KYコーパスに見られる英語母語話者と韓国語母語話者の擬音語・擬態語の使用

カリフォルニア大学 デービス校
ロンドン大学 アジア・アフリカ研究学院
岩崎 典子

1. はじめに

近年日本語における擬音語・擬態語の重要さが見直されている。日本語母語話者をも対象に参考書や辞書が数多く出版され(山口, 2003)、研究も盛んである(田守・スコウラップ, 1999; 荻阪編, 2001; Iwasaki, Vinson & Vigliocco, 2007)。日本語児は、擬音語を擬態語より早い時期から使うこと(Herlofsky, 1998)や、まず自分で創作したオノマトペを使用し、その後語彙化された語を使用するという獲得順序が報告されている(石黒, 1993)。第二言語として日本語を学ぶ学習者にとっても擬音語・擬態語は重要とされるが(Makino & Tsutsui, 1986)、習得は難しいと言われている(Hamano, 1997)。しかし、日本語学習者の擬音語・擬態語の習得過程や母語などの要因の影響は明らかにされていない。そこで、本研究では、母語や日本語能力が擬音語・擬態語の習得に影響するかどうかを調査したい。

2. 調査方法・被験者

本調査では、ACTFLのOral Proficiency Interview(OPI)を文字化したKYコーパスの英語話者と韓国語話者各30名のデータを用いた。英語には擬音語・擬態語は稀有だが、韓国語には音象徴に相違は見られるものの、日本語の擬音語・擬態語と類似する語彙が多く、統語的に類似している(李2000)。コーパスの韓国語話者・英語話者のデータ各30名の内訳は、いずれも初級5名、中級10名、上級10名、超級5名である。調査の焦点となるのは次の3点である。(1) どのレベルの話者が擬音語・擬態語を使うのか、(2) レベルによってどのような語を使う傾向がみられるのか(例えば、初・中級では、擬音語や創作的な語、上・超級では擬態語をよく使用するなど)、(3) 韓国語が母語の学習者と英語が母語の学習者では、擬音語・擬態語の使用頻度や使い方に違いがあるのか。

3. 結果

3.1. 使用頻度

調査の結果、擬音語・擬態語の習得の困難さを反映してか使用された語数は少なかったが、韓国語母語話者も英語母語話者も、中級レベル以上の話者に擬音語・擬態語の使用がみられた。英語話者の場合、30名中13名(中級3名、上級6名、超級4名)に、韓国語話者の場合も30名中13名(中級3名、上級7名、超級3名)に使用がみられ、擬音語・擬態語の使用者数に差はなかった。どちらの話者も日本語能力の高い話者ほど、使用者の割合が増える傾向がみられた。頻度はむしろ英語話者(異なり語数44語、述べ語数計56語)の方が韓国語話者(異なり語数28語 延べ計31語)より多く、母語に同様の語が多いことは日本語での使用頻度に影響していないようであった。また、どちらのグループでも意味的な誤用や逸脱はごくわずかで

していないようであった。また、どちらのグループでも意味的な誤用や逸脱はごくわずかであった。

3.2. 使用語の意味的・統語的分類

使用された語をみると、擬音語・擬態語を使い始める段階の英語を母語とする中級話者の場合は創作的語「ドゥドゥドゥ」や擬音語「ゲロゲロ」、「びしと」を使い、日本語児に報告される習得過程の初期に似通った傾向が見られた。それに対し、韓国語を母語とする学習者は、擬音語・擬態語を使用し始める中級でも「ぞくぞく」「めちゃくちゃ」「ずーっと」などの擬態語を使用していた。全般には、使用された語の大部分は擬態語で、擬音語は英語話者56語中8語、韓国語話者31語中2語のみであった。これは、OPIの話題に擬音語より擬態語の使用を促すものが多いことに起因するのかもしれない。

文法的には、英語話者は主に「ぼいと捨てる」のように副詞として用いるか(20例)、スルを伴って「すっきりする」のように動詞として用いていた(11例)。韓国語話者の場合も割合は逆転するものの、副詞(6例)と動詞(13例)が主であった。「きちっとしたもの」(英語話者)や「テキパキっていう感じ」(韓国語者)などの名詞修飾は超級・上級上の話者に見られたのみであった。

4. 考察

OPIの発話を調査した本研究では、英語話者と韓国語話者の擬音語・擬態語の使用には大きな違いがなかった。どちらも中級レベルから擬音語・擬態語を使用し、使用された語のほとんどが副詞またはスルを伴う動詞表現であった。しかし、数は少ないものの、英語話者の中級学習者には日本語児の習得初期に似通った使用が見られた。擬音語・擬態語の習得段階の解明には、擬音語・擬態語が不可欠な場面設定を用いた実験的研究が必要である。また、日本語教育においては、どのような場面で擬音語・擬態語が重要なかを見極め、さらに、擬音語・擬態語を的確に使用するために必要な文法的側面なども指導することが望まれる。

参考文献

- Hamano, S. (1997) *Sound-symbolic system of Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Herlofsky, W. J. (1998) The acquisition of Japanese iconic expressions: giongo versus gitaigo. *Journal of Japanese Linguistics and Education*, 5, 1-8.
- Iwasaki, N., Vinson, D. P., & Vigliocco, G. (2007). What do English speakers know about gera-gera and yota-yota? A cross-linguistic investigation of mimetic words for laughing and walking. *Japanese-Language Education around the Globe*, 17, 53-78.
- Makino, S., & Tsutsui, M. (1986) *A dictionary of basic Japanese grammar*. Tokyo: The Japan Times.
- 李 殷娥 (2000) 『日本語と韓国語のオノマトペに関する対照研究』名古屋大学大学院 博士論文。
- 石黒広昭 (1993) 「オノマトペの発生」『月刊日本語』22 (6), 26-33.
- 荻阪直行 (編). (2001) 『感性の言葉を研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか』新曜社。
- 田守育啓・スコウラップ、ローレンス (1999) 『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版。

山口仲美 (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』 講談社.

用語リスト

音象徴：言語音が意味を象徴的に表していること。例えば、多くの言語で母音[a]は大きいものや大きいこと、[i]は小さいものや小さいことを示していると言われる。